

[資料]

# 仏教系大学における自校教育の取り組みの現状

—訪問によるインタビュー調査結果を中心に—

米村美奈<sup>※1</sup>淑徳大学自校教育研究会<sup>※2</sup>

## はじめに

平成27年度に淑徳大学教育改革推進事業の補助を受けて「淑徳大学へのアイデンティティを高める教育改革—本学自校教育の基礎研究—」をテーマにおき、その一環として「先駆的大学の自校教育への取り組み」を調べるために訪問による他大学のインタビュー調査と実地視察を実施した<sup>1)</sup>。その研究は、引き続き、同事業の補助を受けて「淑徳大学のアイデンティティを高める教育改革—本学自校教育の具体化のための取り組み—」をテーマとして、自校教育に対する淑徳大学（以下、本学とする）の教職員の意識を把握し、本学の自校教育の目的に合わせたプログラム開発を目指し進めた。自校教育推進におけるプログラム開発のために他大学の先駆的な取り組みを参照することは、プログラム開発から実践の可能性を探るための有意義な資料となり得ると考え、平成27年度の他大学へのインタビュー調査を以下の目的によって実施した。(1) 各大学における自校教育の目的・目標と決定理由を明らかにする (2) 各大学が自校教育に取り組むきっかけや理由を明らかにする (3) 自校教育を実施している効果や学生の反応を知る (4) 自校教育を行なう方法や使用媒体を明らかにする (5) 自校教育が継続できうる組織体制のあり方を知る。ここでの調査対象者は、科学研究費補助金による基盤研究C（平成20年～22年 岩手大学の 大川一毅准教授の「全国の大学における自校教育の実施状況の数量的調査」）の結果でも取り上げられ、先駆的な取り組みがなされていることが書籍等でも確認できた本学と同様の私立大学のうち4校に実施したものであった。

一定の成果が確認された平成27年度の調査をもとに平成28年度は、さらに調査対象大学を絞り込み、本学と同様の仏教系大学を調査対象として、訪問によるインタビュー調査を実施し、自校

---

※1 淑徳大学総合福祉学部教授

※2 岩上達一郎・金澤好隆・酒井めぐみ・桜井昭男・杉原麻美・立木正一・藤森雄介・松倉大樹・山口光治

教育プログラム開発の基礎資料収集を目指した。

## I 調査の概要

今回のインタビュー調査は、自校教育について、①方法や使用媒体、②組織体制、③（仏教行事を含む）学内行事のありかた、④教職員への教育・研修内容、⑤地域との関係、⑥正課内での内容、について知ることを目的とした。インタビュー調査対象大学は、先駆的な取り組みがなされていることが書籍等でも確認できた本学と同様の私立大学で仏教系大学の3校（東海学園大学、四天王寺大学 大谷大学）を調査対象とした。インタビュー調査は、2016年6月9日～9月9日の間に各1回訪問して実施し、インタビュー調査時にあわせて、学内の実地視察も合せて行った。

調査は対象大学の了解を得て、「インタビュー調査ガイド」をあらかじめ対象大学の被調査者（当該事項の担当者）に届けた上で、調査者（2名）が訪問し、インタビューガイドに沿いつつ被調査者の話題に合わせて半構造化インタビューを実施した。以下の表は、ガイドに掲げた項目別にまとめたものである<sup>2)</sup>。

## II 3大学におけるインタビュー調査結果の内容

### 1. 東海学園大学

学校名	東海学園大学（三好キャンパス）
インタビュー調査日	2016年6月9日（木）
インタビュー調査者	酒井 めぐみ、米村 美奈、
調査対象者の所属部署・氏名	東海学園大学 学監 田中 祥雄 氏 共生文化研究所 所長 神谷 正義 氏 学生生活支援センター室 室長 日尾野 一道 氏
自校（史）教育の目的	学生の自校アイデンティティを高めるため
自校教育を推し進めるための組織の存在	大学の附属機関である「共生文化研究所」が主体となり実施。 (共生教育の具体的方法の開発、自校史に係る資料の取捨と教育方法の開発、宗教行事等の企画、立案及び実施体制の構築等を担う。)
仏教系であることや建学の精神を入学前の受験生へ積極的に知らせる方針	入学案内には掲載しているが、仏教の教えを率先して伝えている方針はない。受験生は、仏教系大学という認識からではなく、大学の学習内容に関心があり受験している実態がある。共生の理念は強調して伝えているが、それが仏教に基づくものだと理解をしているかは不明。
建学の精神（仏教の教え）をどのように学生へ教授しているのか	入学式直後のオリエンテーション、1、3年次の必修科目「共生人間論Ⅰ・Ⅱ」等で教授している。
仏教行事をどのように執り行っているのか	(1) 行事の式次第 ① 入学式（礼拝、月かげ斉唱） ② 帰敬式・卒業式（礼拝、献灯・献香・献花、導師灌頂、三帰依文、礼拝、月かげ） ③ 花まつり（降誕会） ④ 朝のおつとめ（毎月25日に実施） (2) 行事の目的 ・それぞれの行事内容に準拠する。

<p>仏教行事をどのように執り行っているのか</p>	<p>(3) 学生の参加のあり方                  ① 花まつりは新入生オリエンテーション期間中のため、全員参加が課せられている。                  ② 「朝のおつとめ（勤行）」は任意参加だが、学生の参加は殆どみられない。⇒ 今後学生の自主的な参加を促すために工夫を試みたい。                  (4) 教職員の参加のあり方                  ① 毎月行われる「朝のおつとめ（勤行）」は任意参加、十数人が参加している。                  ② 仏教行事は、業務の一環に位置づけられている。                  (5) 参加意欲の程度                  ・全体において参加意欲が高いとは言えず、参加意欲の向上は課題である。</p>
<p>入学式と卒業式の式典のあり方</p>	<p>(1) 式典の内容（式次第）                  ① 入学式（礼拝、月かげ斉唱）                  ② 帰敬式・卒業式（礼拝、献灯・献香・献花、導師灌頂、三帰依文、礼拝、月かげ）                  (2) 特別な志向の内容があるか                  ・入学直後に入学報告のため、新入生全員で京都・知恩院への祖山参拝を実施。</p>
<p>学内外にシンボリックな建造物等があるか</p>	<p>(1) 胸像、法輪等                  ・名古屋キャンパスの校舎の上に法輪を設置している。三好キャンパスにはない。キャンパスごとに異なることについて特段の理由はない。</p>
<p>正課内での自校教育の内容</p>	<p>(1) 自校教育授業の内容                  ① 「共生人間論Ⅰ・Ⅱ」（1年次・3年次）※全学部必修                  〈仏教理解、建学の精神と教育理念、学園の歴史、学祖、仏教、浄土宗について〉                  ② 経営学部は2年次に必修科目として「共生人間論実習」を実施。                  ⇒250名程度の学生が全員、福祉施設や寺院等にて実習を4日間行う。                  (2) 自校教育のシラバスのあり。                  (3) 教材⇒東海学園大学作成『ともいき』を使用</p>
<p>自校教育の教職員への教育・研修内容</p>	<p>(1) 取組み内容等                  ① 4月1日の辞令交付の際、建学の精神について15分程度で解説する。                  ② S D研修（大学の歴史、建学の精神、働く意味、共生とは何か？）⇒H27～から実施している。                  ③ 自校教育に対する意見交換会を教職員対象に実施 ⇒H27年度は2回実施している。                  ④ さまざまな部門・年代を代表する教職員を選出して幅広く意見交換を実施。                  (2) 教職員の反応                  教職員意見交換会では、下記のような意見が出された                  ① 宗教行事の意味を学生が理解できるように伝えることが必要。                  ② 学生の共生グループを作って発展させていってはどうか。（共生クラブを作って学生主体で何か実施）</p>
<p>自校（史）教育の始まるの時期</p>	<p>(1) 20年前の開学時期から実施している。                  (2) 経営学部設置段階より日本文化と共生の実習をする構想があり、「共生人間論Ⅰ・Ⅱ」と「共生人間論実習」の科目を開講している。</p>
<p>予算（人的パワー・コスト）</p>	<p>① 入学後すぐに実施する祖山参拝には1,000万円ほどの予算をかけて実施している。                  ② 共生文化研究所が自校教育の拠点として機能している。（専任教員3名配置）</p>
<p>正課内講義</p>	<p>(1) 授業科目「共生人間論Ⅰ・Ⅱ」                  ① 主な内容：学園の歴史、学祖、仏教、浄土宗について                  ② 対象学年：1年次「共生人間論Ⅰ」／3年次「共生人間論Ⅲ」※いずれも必修                  ③ 成績評価：授業の参加態度や取組み姿勢を重視し、厳しく評価している。                  ④ 担当教員：共生文化研究所所属の専任教員3名で実施している。                  将来的には、専任教員が全員1回は授業を担当できるようにしていきたい。                  (2) 授業科目「共生人間論実習」                  ① 対象学生：経営学部のみ2年次の必修科目に位置付け。（他学部は選択科目）                  ② 主な内容：福祉施設・病院・寺院等での4日間の現場実習を通して、他者との共生について実践的に学び、自己変革につなげていく目的。</p>
<p>使用教材</p>	<p>・東海学園大学作成『ともいき』を使用。</p>
<p>自校（史）教育の学生の反応</p>	<p>(1) 学生の授業への参加態度、取組み姿勢はすこぶるよい。                  (2) 2年次の実習も一生懸命取り組み、実習後には顔つきに変化が見られる。</p>
<p>自校教育の推進に向けた取組み</p>	<p>(1) H28年度中、教員に向けてのアンケートを実施予定。（現在項目は検討中）建学の精神をどのように理解しているか、宗教行事への参画意識調査を主目的とする。                  (2) 他大学への視察。・H27年度：仏教大学と京都文京大学 / H28年度：大正大学と淑徳大学を予定。</p>

自校シンボル等について	(1) 名古屋キャンパス：校舎の上に法輪を設置、三好キャンパス：なし (2) 入学直後に実施の祖山参拝の際、新入生全員にお数珠を配付。
地域との関係	(1) 地域に向けた「ともいき市民講座」の実施。 ・浄土教美術の魅力、法然上人の生涯と思想、共生と写経、仏教の基礎 (2) H27年度：20周年記念事業として「共生フォーラム」を2回実施。 ・第1回：仏教と共生 / 第2回：共生～いのちを生かしあって (3) 「花まつり」の地域住民の参加 ① 毎年200人ほどの近隣住民が花まつりに参加している。 ② あま茶をかけてくれた子どもたちには「花まつりセット」と「お菓子セット」をプレゼントしている。 ③ 同日実施の学園祭では、職員有志による「写経体験コーナー」を設け、一枚起請文を書いてもらっており、地域のご高齢者に好評である。 ④ 地域への広報は、公民館などへのポスター掲示、折り込みチラシ等で行う。これらの取り組みから、仏教系大学であることは地域では十分に認知されている。
その他 教育的取り組み	(1) 2年次の11月に「学部行事の日」があり、経営学部では願掛け周りを実施。 (2) 全学生スーツで大樹寺を訪れて写経を行い、書院へ納めている。どの学生も非日常の静かな環境で心を落ち着かせ、写経に取り組んでいる。
自校教育推進に向けての今後の課題	(1) 今後の大学認証評価に向けて、建学の精神をいかに具体化していくかが課題である。そのためには、学生を教育する立場にある教職員に対して建学の精神、教育理念への理解を深めていく必要がある。 (2) 学生向けに、よりわかりやすい教材が必要、学園内の中学校～高校～大学まで、一貫して使えるものを目指して開発中である。

## 2. 四天王寺大学

学校名	四天王寺大学
インタビュー調査日	2016年6月27日(月)
インタビュー調査者	山口 光治, 金澤 好隆
調査対象者の所属部署・氏名	四天王寺大学 教務部長 教授 八木 成和 氏 四天王寺大学 教務副部長 准教授 杉中 康平 氏 四天王寺大学 教務課 課長 榎井 克廣 氏
自校(史)教育の目的	建学の精神は、「聖徳太子の仏教精神に則り『和のこころ』を身につける」である
自校教育を推し進めるための組織の存在	(1) 宗教委員会 宗教委員会規程で設置されており、正課である「仏教Ⅰ(瞑想)」「仏教Ⅱ(写経)」の内容を検討している。委員会には、教務副部長・各学科長が選出する委員・仏教文化研究所研究員が出席している。 (2) 仏教文化研究所 仏教文化について資料の収集・調査・研究を行っている。
仏教系であることや建学の精神を入学前の受験生へ積極的に知らせる方針	入学案内に掲載している。受験生は仏教系大学という認識がされ、地元でも知られている。信仰上の都合上、入学試験時も宗教行事に参加することの承諾をとるようにしている。
建学の精神(仏教の教え)をどのように学生へ教授しているのか	(1) 正課：「仏教Ⅰ(瞑想)」「仏教Ⅱ(写経)」卒業必修 千名規模で週1回、全1年生と全教員が出席。 (2) 正課外：授戒会(じゅかいえ)(※「授戒」とは仏教の戒律を授けいただき仏弟子となる儀式)入学時に全員実施。参加時には、オフィシャルスーツ着用・念珠・聖典聖歌集を持参。
仏教行事をどのように執り行っているのか	(1) 行事の式次第 ・授戒会のみ (2) 学生の参加のあり方 ・行事へは全員参加 (3) 教職員の参加のあり方 ・教員は「仏教Ⅰ・Ⅱ」に必ず参加
入学式と卒業式の式典のあり方	(1) 式典の内容(式次第) ① 入学式(献灯、国歌・学園歌斉唱、宣誓書署名、大学唱歌、応援歌斉唱) ② 卒業式(父母の歌斉唱、献灯、国歌・学園歌斉唱、大学歌、仰げば尊しを斉唱)
学内外にシンボリックな建造物等があるか	(1) 胸像、法輪等 講堂中央には聖徳太子像と講堂に法輪がある。
正課内での自校教育の内容	(1) 自校教育授業の内容：「仏教Ⅰ」「仏教Ⅱ」オムニバス形式。 (2) 自校教育のシラバスはある。 (3) 教材：聖典聖歌集・写経必携。

自校教育の教職員への教育・研修内容	(1) 取組み内容 ① 朝のおつとめ（職員は毎朝、般若心経） ② 教員は採用される際に、仏教であるが、信仰上問題ないかの確認されている。
自校（史）教育の始まりの時期	③ 仏教教育は開学以来行っている。
自校教育の推進に向けた取組み	特記事項なし。
自校シンボル等について	なし。
地域との関係	特記事項なし。
その他 教育的取組み	特記事項なし。
自校教育推進に向けての今後の課題	特記事項なし。
自校（史）教育の学生の反応	(1) 大学の授業開始時には瞑想の時間を設けているためか、教育学部の実習に行く学生は、実習中に切替タイムとして授業の始めに瞑想の方法を取り入れている学生もいる。静かになるので、効果がある。 (2) 卒業必修だから出ているという学生もいる。
その他 教育的取組み	非常勤を含む全ての授業において、授業の開始前に、瞑想・起立・礼を実施。

### 3. 大谷大学

学校名	大谷大学
インタビュー調査日	2016年9月9日
インタビュー調査者	杉原麻美、桜井昭男
調査対象者の所属部署・氏名	大谷大学 文学部 真宗学科 講師 山田恵文氏 大谷大学 文学部 真宗学科 講師 西本祐攝氏
自校（史）教育の目的	(1) 「建学の精神」の具現化 ① 学生ならびに教職員間で「建学の精神」についての理解を共有する。 ② (単なる大学史の紹介や学習ではなく) 歴史を通して先人が求めてきた「精神」開発の内容について考える機会を作る。
自校教育を推し進めるための組織の存在	(1) 「建学の精神」教育推進研究班を組織（2011年～2013年）。学長が責任者で、チーフは文学部部長（真宗学が専門）、他の構成員6名。仏教系の教員のほか、宗教専門以外の教員（幼児教育・教育心理）にもあえて入ってもらった。研究班のミッションは ① 「建学の精神」の現代的表現化 ② 共通科目「人間学Ⅰ」の設計 ② 「建学の精神」を学科教育にどのようにつなげるか < (3) は現段階で未着手 > ③ ②の成果物が後述の学生教職員共通テキスト「大谷大学で学ぶ—建学の精神—」 (2) 自校教育は教務委員会の教務部会が主体となっていたが、今後「仏教教育センター」（2018年開室予定）に集約化する予定。
仏教系であることや建学の精神を入学前の受験生へ積極的に知らせる方針	(1) 仏教系の大学であることを特に前面に出してはいない。 (2) 大学パンフレットでは20年前から「人間が大好き」というキャッチフレーズを使用しているが、宗教や仏教系大学という特色は伏せている。
建学の精神（仏教の教え）をどのように学生へ教授しているのか	(1) 入学式後に東本願寺で参拝式を実施。新入生は全員参加。 (2) 創立者 清沢満之「開校の辞」と第3代学長 佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」を教える（原文を英文に訳したものをあらためて日本語に翻訳して使用）。これらはテキスト、学生手帳に掲載している。 (3) 学内の博物館では、春（4～5月）の企画展で大学に関する内容を展示。「人間学Ⅰ」の講義内で見学する場合もある。
仏教行事をどのように執り行っているのか	(1) 宗教行事（誕生会・報恩講・開学記念式典）は、学生は自由参加、教職員は全員参加。 (2) 毎月の勤行は部長のみ参加。大谷派の教師資格をめざす者は全員参加（200名弱）。 (3) 伝道部の部員が混声合唱団として参加。
入学式と卒業式の式典のあり方	・入学式で念珠を配布。その後に東本願寺を参拝。

学内外にシンボリックな建造物等があるか	(1) 曇鸞上人にちなむ「知進守退」の石碑（東京での開学時にあったもの）、正門左に位置する。 (2) 京都移転時のレンガ造りの建物「尋源館（じんげんかん）」、大学のシンボルであり、2016年にキャンパス内にできた新校舎は、どの教室からも尋源館が見えるよう設計。
正課内での自校教育の内容	・「人間学Ⅰ」自校教育（創立・建学の精神）、仏陀の思想、親鸞の思想、人権教育→この4要素を基軸にガイドラインを策定し21人の専任教員（真宗学・仏教学）が行う。（21人の教員は各クラスの副担任）
自校教育の教職員への教育・研修内容	(1) 研修会実施。新任教職員には学長が講話、「大谷大学で学ぶ」がテキスト。 (2) 大谷は全体の研修会があり、大学は職員のみ参加。新任教員はFD研修会。
自校（史）教育の始まりの時期	・2011年から始まる。現在は2018年の学部複数化を見据えて活動。
予算（人的パワー・コスト）	不明
正課内講義	(1) 1年次必修 通年4単位「人間学Ⅰ」と、2年次以上選択必修4単位（2科目）の「人間学Ⅱ」がある。Ⅰは学科のクラスごと（20～50名）。 (2) 「人間学Ⅰ」自校教育（創立・建学の精神）、仏陀の思想、親鸞の思想、人権教育ガイドラインを定め21人の専任教員により実施。教員間で実践内容の共有も行う。 (3) 「人間学Ⅱ」各学科からテーマ案を出し大学で検討し決定。非常勤を含む担当者に大学側が依頼（20コースぐらい）。テーマは担当者裁量。学生から「あまりに多様でⅠと繋がっていない」との声もある。
使用教材	(1) 学生教職員共通テキスト「大谷大学で学ぶ—建学の精神—」⇒A4判 カラー 32ページ+表まわり。 ① 2014年に試験導入し、修正・改編したものを2015年度以降、全学で使用。 ② 構成 はじめに／大谷大学のあゆみ／「建学の精神」を学ぶにあたって／真宗大学開校の辞（原文・語注・解説）／大谷大学樹立の精神（抜粋版：原文・語注・解説）、真宗大学開校の辞（英訳・現代語訳）／大谷大学樹立の精神（英訳・現代語訳）／清沢満之（初代学長）略歴、佐々木月樵（三代学長）略歴／大谷大学「建学の精神」年表 ③ 開校の辞は、現代語訳（英訳をさらに再翻訳）によって学生が理解しやすい文章に一新入生には「人間学Ⅰ」の講義で使用。
自校（史）教育の学生の反応	「こんなにも歴史のある大学だと思っていたしなかった」（1665年設置の「学寮」が原点）、「誇りを持てるようになった」といったコメントが多くあがっている。
その他 教育的取組み	尋源館（1913年竣工）での声明の講義。
自校教育の推進に向けた取組み	・1年次の「人間学Ⅰ」を履修した際の教員が副担任となって指導。
自校シンボル等について	「尋源館（じんげんかん）」。
地域との関係・取組み内容	特記事項なし。
その他 教育的取組みの・実践内容	特記事項なし。
自校教育推進に向けての今後の課題	(1) 「人間学」の学びを学科の学びにどう活かしていくか (2) 教職員の意識の問題

### Ⅲ インタビュー調査についての考察

上記のように表に整理したものがインタビューにより聴き取りを行なった内容をまとめたものである。さらにインタビュー調査の結果に考察を加えまとめた。

#### 1. 仏教系であることを知らせる方針について

各大学により、仏教系大学であることを積極的に知らしめていくかどうかについては、違いがあった。受験生の時から仏教系大学であることを明らかにし、その点を理解した上での入学を前

提としている大学もあれば、受験生のニードを勘案し、あえて仏教系大学を全面に出していない大学もあった。しかし、どの大学にしても建学の精神は、仏教思想に反映されているものであるため、入学後はどの大学も建学の精神とイコールでもある仏教思想への教育を積極的に行っていくことに変わりはない。この仏教系であるかどうかを知らしめる方針は、宗門校であるかどうかということにも関係してくるであろう。

仏教系を全面に出している大学は、地域住民に向けた仏教行事や学習会を開くなどの教育的な場も提供し、地域に慣れ親しんでいる仏教系大学として存立している。一方、仏教系大学を全面に出していない大学が入学を迎えた際にいかに仏教思想を伝授していくかの取組みは、工夫がより必要とならざるを得ない。ひとつの大学では、信仰上の都合上、入学試験時に宗教行事に参加することの承諾をとるようにしているなど宗教教育を徹底していく難しさがわかる。

どの大学も仏教をひとつの宗教として教職員や学生に伝えていく意図ではないことは一致している。あくまでも仏教思想を前提にする建学の精神をどう教授していくのかということに注力しており、実際には苦心している状況がある。

## 2. 建学の精神と大学行事と仏教行事

どの大学も当たり前に入式や卒業式が執り行われているがその内容は、仏教を背景とした式典であった。さらに入式や卒業式の後に宗派の総本山に学生全員で参拝するなどの大規模な取組みも行われている大学があった。

また、大学行事だけではなく、仏教行事はどの大学もそれぞれに実施しているが学生の主体的な出席者が望めないのが共通した課題であった。その為、学生だけに限らないが自由参加にせず、全員参加を求める行事にしているものもあった。仏教行事の出席については、信仰上の制約を考え、学生、教職員に了解をとるようにするなどの配慮もなされている大学もあった。

大学行事も仏教行事も建学の精神が込められて執り行われているという側面と行事そのものが建学の精神を伝えていく機会と捉えられていることが行事の内容や予算の分配のあり方からも理解できた。したがって、自由参加とせずに全員参加を呼び掛ける方針となるのであろうし、それが各大学の課題となって上がるということであろう。

## 3. 自校教育におけるシンボル

大学による法輪を始め、石碑や建造物など工夫をこらして大学のシンボルとなるものを設置していた。その意味をどこまで学生が理解しているのかどうかは明らかにはなっていないが大学の建学の精神を視覚から提供している取り組みといえよう。また、大学の中には、数珠を入学時に学生全員に配布し、同じものを持参して総本山に参拝に行くという取り組みを行っている。数珠は、仏教とイコールの意味で学生には伝わり、同じものを入学時に持つという初期における建学の精神の理解の方法としては、有効であると捉えられる。仲間で同じものを持ち、参拝する行

為は、たとえ思想を深く理解するところまで及ばなくても建学の精神を学ぶことを求める大学の姿勢が伝わると考えられ、新入生の印象として強く残ることになるであろう。

今回のインタビュー調査の対象大学に入っていないが仏教系大学の1つである龍谷大学は、2010年度にブランディングプロジェクトを発足させ活動を始めている。その取り組みから「ブランディング活動をそれぞれ単独で進めるのではなく、建学の精神に結び付けながら議論を重ねていくことによって、大学構成員をより広く巻き込みながらブランディングを進めることができる」と考察している（築地・藤井 2015）<sup>3)</sup>。そこには、大学ブランディング活動と大学構成員の建学の精神の共通理解とは、相互に深い関係を持つという認識がその根底にある。大学の全入学そして、大学の淘汰の時代に自校教育も大学ブランディングという広い視点で検討することが必要な時代となっているともいえよう。

#### 4. 自校教育における使用教材

オリジナル教材を作成している大学と既存のものを使用している大学とそれぞれであったがどちらも自校史を伝えるだけに留まらず、仏教思想を伝えていく姿勢が明確にあった。仏教という背景が明確に存在したところでの建学の精神であることがその理由であろう。

教材は、正課の講義でテキストとして使用する場合と正課外で使用する場合とでその内容も用途も異なるが学生のみを対象とするのか教職員も加味した教材として作成しているのかも含め、その内容にも差がある。しかし、どの教材も文字ばかりで提示するのではなく、写真や挿絵などを入れ、文字離れが進む現代に受け入れやすい方法を工夫していることがわかる。こうした工夫は、簡単に出来上るものではなく、プロジェクトチームで複数年かかって完成させている大学もあり、その丁寧さと意気込みがわかった。教材は、教育そして、学習をする上で大変重要な道具であることから大学の自校教育に対する姿勢が明らかになるだけでなく、その真剣さも伝わってくる媒体でもあることが改めて理解できる。

#### 5. 教職員に対する自校教育と推進のための取り組み

どの大学も独自の方法によって、教職員に対し、研修の機会を設け自校教育を実施していた。特に教職員の採用時にどの大学も講話を行い、自校教育を実施している。しかし、新入教職員の入職時になされた自校教育がその後、プログラム化され系統だった学びになるような取り組みがなされている大学はなかった。こうした系統だったプログラムを構築し、教職員が学ぶ機会を持つことが学生への自校教育推進の要素にもなり得るだろう。どの大学も研修等の時間確保には、苦心しており継続的で系統だったプログラムを構築することは難しい現状があるといえよう。

その他に大学の中には、教職員に自校教育に対する意識調査（アンケート）の実施や意見交換会を実施し、積極的に教職員が参加する仕組みをつくる等の工夫を行っているところもある。こ



うした取り組みは、教職員の自校教育に対する意識が高くなると同時に学生教育にも反映されることにつながる意欲的な取り組みだといえる。

## 6. 自校教育を推し進める組織

どの大学においても自校教育を推し進める独自の専門的な組織が存在していた。こうしたことが私学の特長となるであろう。組織名は、大学ごとに様々であったがどの大学も何を目指して設置しているのかが名称から推測可能なものである。その組織に専任教職員を配置するかどうかは、大学によって違いがあった。しかし、こうした組織が存在することでその大学の自校教育に対する姿勢が如実に現れているといえよう。

組織における業務は、正課の講義や正課外教育内容を計画・運営し、自校教育や仏教に関することを調査、研究するなどが主たるものであった。こうした取り組みを様々な教職員を巻き込んで実施していることに特色がある。

現在において、自校教育そのものの専門家が存在するわけでもなく、また、誰でも教職員が理解していなければならない内容でもあるという特徴から教職員全体を取り込んだ取り組み方法や組織のあり方がより重要となってくるであろう。

## 謝 辞

本調査・研究は、淑徳大学教育改革推進事業の補助金を淑徳大学自校教育研究会が受け、実施したものである。

## 【注】

- 1) 詳しくは、平成28年度総合福祉研究 第21号掲載論文の「淑徳大学における自校教育の基礎研究」を参照のこと。
- 2) 倫理的配慮：本調査は、データの活用や結果の公表（学校名・対象者氏名を含む）について各大学担当者に対し、インタビュー調査の実施の際に承諾を得ている。
- 3) 築地達郎・藤井彰二「大学ブランディングと『建学の精神』の“発見” —ある仏教系大規模総合大学の事例から」『第19号 広報研究』日本広報学会 2015年 p.109.